

注解『七十一番職人歌合』稿（三十一）

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第六十五番および第六十六番の注解を収めた。

六十五番 念仏宗 法花宗

〔職人尽〕

〔鶴岡放生会職人歌合〕三番

左 持経者

まきれにし袖の白玉いかにそとおしへかほにもみゆる月哉
しのひかね心を人にそめ紙のくりかへすにも色は見ゆらむ

右 念仏者

あはれいつか果す涅槃の心にて常住世なる月を見るへき
こゑのあやはつるゝ糸のよりすちり人にかくるは心なりけり

判云、月は、左歌、五百弟子品をさゝけ、右哥、四十八願門をひらけり。教の文句、歌の勝劣、定め申かた
く侍へし。恋は、左哥、詞のつき、心のきて、歌よみといはんにとらんことなく、まことしくよめるに
こそ侍らめ。経をそめかみといへるも、物のゆへしれりと見ゆ。右の哥、声のあやはつるゝ糸の、といへる
に、人思よるへからず。君子なりと申へくや。自由ならずして自由を得たり。但、たゞしからぬ所の侍れば、
為持。

〔後撰夷曲集〕尺教歌の中に あみだぶと申す斗をつとめて浄土の莊嚴みるぞ嬉しき法然上人 〔人倫訓蒙図彙〕
浄土宗 人皇八十二代後鳥羽院建久五年甲寅に法然上人の所立也。用ゆる所、浄土三部経、並びに善導大師觀經の積、恵
心僧都の往生要集等也。 / 法花宗 人皇八十六代高倉院承安元年辛卯、日蓮上人所立也。用ゆる経積、天台に同じ。
一家におゐて其の法語教書あり。御書と号す。人皇八十九代後深草院建長五年三月廿八日、朝日に向かひてより広めたま
ひしなり。 〔華紅葉〕 寄念仏恋 明け暮れに申せど君はつまはじき願以此功德ちやんちやんとおけへ湖流 〔誹諧職
人尽〕 念仏宗・法華宗 雪と消えし跡の光や弥陀如来へ貞徳 散る花を南無阿弥陀仏とゆふべ哉へ守武 我が家の仏
尊し神無月へ任口上人 居風呂を振る廻はれたる十夜かなへ史邦 あさがほの阿の字忘るな南無仏へ珪琳 日ぐら
しや羽織揃ふて夕念仏へ東国 黒谷へ獅子が谷から牡丹かなへ長孝 雪折れを起こして行くや寒念仏へ買明 寒声
を使ひならずや歌念仏へ鳥左 本為凡夫兼為聖人 文盲な人ぞ尊き法の春へ祇明邸 頼心 釣狐宿は窓なし寒念仏へ
羊素 蕎麦の湯に舌のまはりや寒念仏へ水府 遊鱗 甲城の南、寺家といふ町はづれに、いかにも古き物斗商ふ店の
すみに、弥陀如来と書きたる額あり。大きき尺にみたく、箔の文字もいたく煤けたれど、さすがに御仏の光残りて、した
はし。僅かの価やりて、我が物と思ふもおかし。彼の塵ほこり打ちらはらひ、草庵の西の小窓にかけたり。折から刈り取る
麦の秋風も西より来るなるべし。能く結縁し奉ると、やがてこの窓の名として、明けくれお念仏を申さんと嬉し。麦秋の
風も西吹くや弥陀の窓へ黒露 念仏講に入りては死なぬが損なりと云ふ うかめうかめ念仏講の銭も蓮へ寥和 深著
世界無患心 つとめよや親もあたらぬ巨燧哉へ嵐雪 又わか葉我は身延の奥を見んへ敬雨 かた言の御命講も同じ仏
哉へ水国 妙法の明るき山も一夜かなへ蟬話 起きかへる身延は寒し十三夜へ水語 ちりばめむ末を身延の桜苗へ

可速▽ うぐひすやよそめもふらず敷の中へ随之▽ 八宗の中の堅みや法の華へ吹笙舎 子鳳▽ 元政の軒も光るか御命おんのみこと
 講へ寥和▽ 〔職人尽狂歌合〕左 (寄) 法花宗(恋) 石和川いさわがわいさてふ君を片法花かたくもほれし石の題目 左、いさ
 はいなと同じくして、うけひかざる詞なるを、いさ川いさがわに続けてあやなされし、興あり。……よりて、左を勝と定め侍り。
 / 左 (寄) 法花宗(恋) やる文の数さへ廿八本は妹をくどくの法花経の巻 左、一首よくととのひて、味はひ少な
 からず。……左可為勝。 / 右 (寄) 法花宗(恋) 待ちあかすおのが身延は題目のおそしと思ふ君が通ひ路 ……
 右、待恋の心、いふばかりなくおかし。ろなう勝と定むべし。 / 左 (寄) 法花宗(恋) いふことをはね題目のは
 ねつけてきかぬは妹が法宗かたぎか 左、はりたましひなる人をうらめるさま、おもしろし。……左右、よき持にて侍る
 べし。 / 左 (寄) 念仏宗(恋) 一枚の起請を見せ念仏者妹を口説くの種とこそすれ 左、なべて起請といふ物
 は、かたみに心とけたる人の、猶後をかけて契れるにすることなるを、これは、いまだ女のうけひかざるに起請をさへ書
 きて出だせる、いといとさまかへたるよばひ心なり。右、……またき勝にて侍るべし。 / 左 (寄) 法花宗(恋)
 かた法花かたく誓ひの身延よりおそしとかこつ待つ宵の床 左、契りし人を待つ宵のさま、よろしく聞こゆ。……左を勝
 とすべくや。 / 左 (寄) 念仏宗(恋) せんかたも南無阿弥陀とぞ思ひ切る跡より恋の責め念仏宗 左、古今集の
 歌にてとりなされし、感ふかく侍り。……猶、左勝と申すべくや。 / 右 (寄) 法花宗(恋) あふことの方便品も
 願ふなりくどくに落ちぬ人はあらじと ……右、方便品、たふとくいはれあれば、此の問注、祇宜殿の負にて侍るべし。
 / 右 (寄) 念仏宗(恋) 念仏の寝んかといて逢ふ夜半は申すやうなき床の嬉しさ 左右いづれもよろしく聞こ
 ゆ。但、続けがら、いささか左勝りぬべくや。 / (寄) 法花宗(恋) ・ (寄) 念仏宗(恋) 一筋に妹は身延のかた法
 花そしらぬ顔をいく度拜ます 談義にも如夜叉と人にすむれど恋しかりける如菩薩の顔 左右、かたきどちの宗門なが
 ら、いづれも道理あらはれて、たふとさは勝り劣り侍らじかし。 / 右 (寄) 法花宗(恋) くだけども兎角返事は
 長房の数珠程心もむばかりなり ……右もわろからねど、いささか左勝るべくや。 / 右 (寄) 法花宗(恋) 祈る
 身は法花とならん題目の髭ほど君に我はのびたり ……右、百日法花といふ物になりて恋を祈る心なるべし。勝りぬべし。
 / 左 (寄) 法花宗(恋) 吾妹子が心の剣折れてよりうき名のたつの口もいとほし 左、たちし名はいとはで、う

けひきたるを喜べるさまなるべし。右、……左にはいささか劣りぬべきや。／右（寄）念仏宗（恋）同じ床にねん仏宗と思ふより百万遍も送る玉つさ ……右、大方よろし。但、百万遍と申す詞、古めて侍れば、左為勝。〔江戸職人歌合〕二十五番 念仏宗・題目宗 西にとは心がけてもさしいづる月にいくたび後ろ向くらむ 月も月葉月のもちぞ 鬼子母神十羅刹女も冥加あらせ給へ 左右共不ニ難申一。判云、左右歌無ニ幾勝劣一。仍為持。外心ありと思ふな我が宗は雑修といひて嫌ふならひぞ 口癖に恋しゆかしとつぶやくを自我偽読むとや人の思はん 右申云、左歌、腰の五文字 ちちごちしく聞こゆ。左申云、つぶやくも優にも侍らずや。判云、左右の腰句、げになだらかにも侍らずや。釈教の歌は、字音なども入りまじりて、なだらかならぬも常の事ながら、これはなほ思はるべくや。持にて侍るべし。

【本文】

六十五番

はちすはのにこらぬつゆにやとるなり

これそ上ほん上しやうの月

我のりの月そてらさむすゑの世の

よ経しちめつさもあらはあれ

左右ともに、わか宗旨をあけたり。

法の勝劣を論すへからす。

往生のさほりもそするまつ人を

くわんおんせいし来迎もかな

一目見てわすられさりしおも影は

十羅せち女もかくやとそおもふ

これ又ともに、観音勢至を使とし、十羅

はちすは一〔類〕蓮葉 つゆ一〔類〕露

これ一〔類〕是 上ほん上しやう一〔類〕上品上生

のり一〔類〕法 てらさむ一〔類〕てらさん すゑの世一〔類〕末の世

わか一〔類〕我

さほりもそ一〔白〕さほりもて まつ人一〔類〕先人

くわんおん一〔忠〕明くほんおん〔類〕くわん音 もかな一〔類〕も哉

見て一〔類〕みて おも影一〔類〕おもかけ

十羅せち女一〔類〕十羅刹女 おもふ一〔類〕思ふ

これ一〔類〕是 十羅刹女一〔類〕十羅せつ女

剝女を思かけたり。且は、をそれなきに
あらず。光源氏の物語にも、法けたち
くすしからむ、と申めり。左右ともに、しかる
へからず。

念仏宗

即便往生もたうとく、
往生も只一たひ南無と
となふれば、極楽に生。
なにのうたかひかあらん。
南無阿弥陀仏、く。

法花宗

末法まんねん、よ経
しちめつの時、此妙法花と
申候は、我才か祖師日蓮上人の
御時、くれくとかれ候ときは、



〔語注〕

◎念仏宗は、称名念仏によって極楽に往生することを説く宗派、すなわち、浄土宗・浄土真宗・時宗などの総称であるが、ここでは、画詞の「即便往生」という言葉や、法花宗と番われていることから、法然によって開かれた浄土宗を

思かけたり―〔類〕思懸たり 且は―〔類〕且をそれ―〔類〕恐
しかるへからず―〔類〕不可然

念仏宗―〔忠〕六十五番念仏宗

一たひ―〔白〕一度
となふれば―〔白〕唱れば

く―〔白〕ナシ〔忠〕×〔明〕〔類〕××

法花宗―〔白〕法華宗

まんねん―〔白〕万年 よ経しちめつ―〔白〕余経悉滅

妙法花―〔白〕妙法華経

申候は―〔白〕申は 上人―〔白〕聖人

くれく―〔白〕暮く ときは―〔白〕ナシ

指しているものと思われる。

法花宗（法華宗）は、日蓮によって開かれた宗派。『法華経』を重視し、その教えによってのみ人は救われる、と説く。他の宗派、特に浄土宗とはするどく対立した。

◎はちすはのにこらぬつゆ 蓮は、汚泥に生えながら美しい花を咲かせることから、『法華経』從地湧出品に、仏弟子の高潔な心を称えて、「不染世間法、如蓮華在水」とするなど、仏教を象徴する植物。歌にも、「蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむくへ遍昭」（古今集、三、夏歌）などと詠まれた。

◎上ほん上しやうの月 「上品上生」は、阿弥陀の浄土に往生する者を九つの等級に分けたうちの最上級。『観無量寿経』に説く。転じて、一般に最上のもの。こゝは、月がこの上なく美しい、というのである。

◎我のりの月そてらさむ 「我法の月」は、法華経ないし法花宗の教義を月にたとえた言葉。月が地上を照らすように、末の世（次項参照）を照らすのは他でもない法華の教えだ、というのである。

◎すゑの世の上経しちめつ 「末の世」は末法のこと。仏教がすたれて、釈迦の教えだけは残るが、いかに修行しても悟りを開きえない、とされる時代。釈迦入滅から二千年（千五百年とする説などもある）を経た時から始まり、一万年続くという。我が国では、永承七年（一一〇五二）以降末法に入ったとする説が広く用いられた。「余経悉滅」は、末法においては『無量寿経』以外の経はすべて滅んでしまうということ。慈恩の『西方要決』に、「末法万年、余経悉滅、弥陀一教、利物偏増」と見える。法然は『選択本願念仏集』に、『西方要決』のこの言葉を引いて念仏往生を説く。『法然上人絵伝』等にも見え、浄土宗で重視する言葉。一方、日蓮も、『守護国家論』に同じ言葉を引き一定の関心を示すが、自身は、『法華経』に「悪世末法時、能持是経者、則為已如上、具足諸供養」（分別功德品）などとあるのに基づき、『法華経』こそが末法の世を照らす唯一の教えだと説く。

◎さもあらはあれ （浄土宗の僧たちは「余経悉滅」などと言っているが）それはそれとして。

◎法の勝劣を論すへからす 教義上の優劣はつけることができない、というのである。実は、歌としての優劣がつけがたいのであるが、冗談めかして、こういう言い方をしたのである。六十八番、山法師・奈良法師の月の歌の判詞に、「法

に是非を申がたし」、六十九番、華嚴宗・俱舍宗の月の歌の判詞にも、「ふかき心をつたへざれば、まさるおとる申がたし」と、ここに似た言い方が見える。

◎往生のさはりもそする 「さはりもそ」は、白石本は「さはりもて」とするが、誤写であろう。「往生」は、この世を去って仏の浄土に生まれること。ことに、阿弥陀仏の極楽浄土についていう。浄土宗では、南無阿弥陀仏の名号を唱え念仏すれば、極楽浄土に往生できる、と説く。「障り」は、妨げ、障害。恋心を持っていては、それが極楽往生の妨げともなろうか、というのである。

◎まつ人を 類従本は「先人を」。明暦板本は、しかるべき文字には濁点(本稿の校合では省略)を施した本であるが、ここは「まつ人を」と濁点はなく、「待つ人を」と解したものと思われる。「先づ人を」、「待つ人を」、いずれでも意味は通じるが、前者は後者に較べて、やや不自然な表現か。後者は、下句の「来迎もがな」によく照応するように思われる。ただし、「待つ人」は、通常、女が待っている相手の男を意味するから、男の歌としては不自然か。『新大系』は、「先ず」と解する。

◎くわんおんせいし来迎もかな 「もかな」は、類従本は「も哉」とするが、誤写であろう。「くわんおんせいし」は、観(世)音菩薩と勢至菩薩。ともに阿弥陀仏の脇侍。「来迎」は、臨終の人を極楽浄土に迎え取るために、仏菩薩が姿を現すこと。阿弥陀仏と観音・勢至の両菩薩が姿を現す三尊来迎が理想的とされた。全体で、恋の相手を観音・勢至が迎え取ってほしい、つまり、相手が死んでくれればいい、というのである。自分が死んでしまいたい、というのが、恋の歌の常套的な発想であるのに対し、ここはその逆で、きわめて異例かつ滑稽な表現。

◎十羅せち女 十羅刹女。「せち」は「せつ」とも表記する。『法華経』陀羅尼品に説く、十人の羅刹(人を魅惑し、血肉を食う悪鬼)の女。釈迦の説法に接して、法華経受持の人を守る神女となった、という。きわめて美麗であるとされ、その像は天女の形や、和様化した十二単衣姿として描かれることが多い(佐和隆研『仏像図典』)。

◎且は 類従本は「且」とするが、誤脱であろう。

◎をそれなきにあらず 畏れ多いことだ、というのである。

◎光源氏の物語にも、法けたちくすしからむ、と申めり 『源氏物語』 帚木卷の頭中将の言葉、「吉祥天女を思ひかけんとすれば、ほふけづきくすしからんこそ、又わびしかりぬべけれ」を指す。「ほふけ（法気）づく」は、抹香くさくなる、の意であるが、「法気だつ」という言葉は管見に入らない。「奇し」は、きまじめで堅苦しい様。観音勢至や十羅刹女は、色恋の相手としてふさわしくない、というのである。

◎即便往生もたうとく、往生も只一たひ南無となふれば、極楽に生 「即便往生」は、至誠心・深心・回向発願心の三心をもって称名念仏すれば、現世において極楽往生が決定する、とされること。もと『観無量寿経』に見える言葉で、法然の弟子で浄土宗西山派の祖、証空が強調した。「即便往生も……、往生も……」という表現は理解しにくい。

◎南無阿弥陀仏、くく 白石本は「くく」を脱する。

◎妙法花 白石本は「妙法華経」。『妙法蓮華経』、すなわち、いわゆる『法華経』のこと。

◎申候は 白石本は「申は」と「候」を脱するが、誤写であろう。

◎上人 白石本は「聖人」。

◎くれく くりかえし。

◎ときは 白石本はこの言葉を脱するが、誤写であろう。「ときんば」の転で、(くれくれ説かれ候ふ) 上からはすなわち、の意か。法花宗の僧の口調を移したもののか。

〔絵〕

念仏宗は、僧衣の上に袈裟を掛ける。白石本は、右手に撞木を持ち、前に置いた鉦鼓を叩く体。

法花宗は、僧衣を僧綱領（しやうこうりやう）にして着、袈裟を掛け、右手に扇を持つ。白石本・忠寄本・明暦板本は、左手首に数珠。

〔参考〕

○ ただ一念（ひとひ）おこり落とさん

名号をとなづならぶら声は日ませにて

(竹馬狂吟集)

○法華衆かどに衣をほし置きて

法のこはさよ情のこはさよ

(誹諧連歌抄)

○河瀬の石を拾ひあげ、河瀬の石を拾ひあげ、妙なる法の御経を二石に一字、書きつけて、波間に沈め申はば、などは浮かまざるべきなどは浮かまざるべき

(謡曲「鶺鴒」)

○これは甲斐の国身延山より出でたる沙門にて候ふ

(謡曲「梅枝」)

○それ世尊の教法は、五時八教に配立し、権実二教に分かてり、さる程に滅後の弘経も正像末に次第して、今後五百歳の時なれば、時機に叶ふこの妙経を弘めつつ、国土安全の勧めをなせしその甲斐の、身延の山に引き籠もり、寂寞無人の樞の内には、誦誦此経の声絶えず、一心三観の窓の前には、第一義天の月まどかなり

(謡曲「現代七面」)

○帰命妙法蓮華経、一部八卷四七品、文々ことごとく神力を示し演べ給ふ、濁乱の衆生なれば、この経は保ちがたし、暫くも保つ者は、我則歡喜して、諸仏もしかなりと一乗の、妙文なるものを、深著虚妄法、堅受不可捨ぞ悲しき

(謡曲「身延」)

○〽惣じてわが法は、南無阿弥陀仏と一声となへても往生するが、わごりよの法は、一部の八巻のと云ふて、長ひ事をいふても往生はなるまひ程に、身が弟子にならしめ。〽あふ、わごりよの法のやうに、あそこの隅へ行ても、ぐどぐど、爰の隅へ行ても、ぐどぐどと、同じ事を云ふて、黒豆を数よふより、身が弟子にせう。身が法は、忝くも法花最第一の金言なれば、法華経をいただひても成仏するは疑ひなひ程に、人を弟子にとらふよりも、弟子にならしめ。

(虎明本狂言「宗論」)

六十六番 連歌師 早歌諷

〔職人尽〕

〔人倫訓蒙図彙〕連歌師 連哥はむかしよりあつて久しき事なり。日本武尊、にひはりつくばをすぎていくよかねつる、との給はせけるを、燭をとる人、其のすゑをつぎし、是、連哥の始め也とかや。定家家隆等の句あまたあり。然れども、百韻の法式をたてて、さかんにひろまる事は、宗祇法師牡丹花にはじまり。中比、東山殿の代にいたつて、此の道盛んにして、連哥の新式定まれり。それよりして、代々つたはり、慶長の比、昌琢入道、其の名高く、其の子孫、添削の家として、花本と号す。〔誹

諧職人尽〕連歌師 鶯は連歌もするや花の下へ親重 髭宗祇池に連あるころ哉へ素堂 歌か否連歌にあらずにし肴へ文隣 二年の月のあるじや珠玉庵へ宗瑞 あさがほや廿九日は曇れかしへ珪琳 初雪や連歌座敷は寒けれどへ梅徳 連歌師と親しく成りぬ五月雨へ林里 連歌師の信濃を使ふ師走哉へ祿祥 吐月峯の秋や昔のいものやまへ永家 たち花や連歌のとうのかり座敷へ寥和 早歌うたひ 寒声につれもなげなる早歌かなへ寥和 〔職人尽発句合〕十六番左 連歌師 裏白の名をこそ得たれ雪の松 左右ともに、当道をいひたてて争論に及ぶはむくつけし。季吟翁七十番歌合の判にいはいはく、和歌と俳諧とは其の詞こそ変はり侍らめ、故実と心ばへは何のわいたためか侍らんと云々。我が家の仏たうとくは、人目許さず、箱に秘めて、持とすべし。

【本文】

六十六番

秋きりは月すむやまのうちこしも
雨のたくひにきらふとそみる
もろ友に月にうたはんけにやさは
いまはたゝれもさそおほえたる

秋きりー〔類〕秋霧 やまー〔類〕山

もろ友にー〔類〕諸共に

いまはたゝれもさそおほえたるー〔類〕今はた誰もさそ寛たる

けにや娑婆の秘曲、其興侍り。但、けにやさらは
 さそ覚たる、誰、いひおほせざるにや。左、霧は降物に
 打越を嫌新式の心、可然は侍れと、山の打こし、
 たゝ詞にや。彼是をかよはして、持とすへくや。
 恋わひて神にたむけのつらね哥
 あふさかやまをふし物にせむ
 別地になくかうたふかかれこゑの
 しほりあけたるそてのなこりは
 山を賦物にて会坂の手向、よき連哥のよりあひ、
 神明納受の法楽なるへし。又、袖の余波の美声、
 ちか比の早哥の聴聞、耳をおとろかし侍り。

連歌し

いまたこの
 おりに、花か
 候はす候。

早歌うたひ
 かた見にのこる
 なてしこの



さそー〔類〕嘸

可然は侍れとー〔白〕可然侍れと 打こしー〔類〕打越

たゝ詞ー〔類〕只詞 かよはしてー〔類〕通はして 持とすへくやー〔類〕可為持哉

恋わひてー〔類〕恋侘て たむけー〔類〕手向

あふさかやまー〔類〕逢坂山 せむー〔類〕せん

別地ー〔類〕別路 かれこゑー〔類〕かれ声

そてのなこりー〔類〕袖の名残

なるへしー〔類〕成へし

ちか比ー〔類〕近比 早哥ー〔類〕早歌 おとろかしー〔類〕驚かし

〔耳をおとろかし侍り〕ノアトニー〔忠〕〔明〕〔類〕持とすへし

連歌しー〔白〕連歌師〔忠〕六十六番連歌師

このおりにー〔白〕〔忠〕此折には〔明〕〔類〕このおりには

早歌うたひー〔白〕早歌諷〔忠〕早歌諷うた

かた見ー〔白〕〔忠〕かたみ

〔語注〕

◎連歌は、応仁の乱から江戸開幕までのころ最盛期を迎え、宗祇（一四二一—一五〇二）が出て、明応四年（一四九五）、『新撰菟玖波集』が編まれた。

早歌は、中世に武家階級を中心に流行した謡い物。速いテンポで歌うことからこの名で呼ばれた、という。

◎秋きりは月すむやまのうちこしも雨のたくひにきらふ 「打越」は、連歌用語で、付句の前の前の句。また、付句が打越の句と同趣に陥る弊をも「打越」と言い、その弊を避けることを「打越を嫌ふ」と言った。その「打越」に、秋霧が山を打ち越えて来る意の「打越」を掛ける。「雨の類に嫌ふ」は、「霧」という言葉は「雨」の類義語であるから、前々句に降物が詠まれていれば、「雨」同様に避けるべきである（霧は降物に打越を嫌新式の心）の項参照）ことをいうのであろう。そのように、綺麗に澄んでいる月にとって、山を打ち越えて来る霧も、雨同様に嫌うべきものだ、というのである。

◎月にうたはん 「月に歌ふ」は、月に向かって歌を歌うこと。「松風の音もさびしき暁の月に歌ひて過ぐる山人へ覚性法親王」(統詞花集十六、雑上)などの例がある。

◎けにやさは 現爾也娑婆。早歌の曲名であり、また、その曲の歌詞「現爾也娑婆、東土仁三尊哉、覚足那、現爾也娑婆、東土仁哉、三尊哉、覚足那、げにやさば、とんどにさぞや、おぼえたるな」(『日本歌謡集成五』所収『宴曲集一』)の一節。ここは、上からの続きとしては曲名、下句への続きとしては歌詞の一部と見るべきであろう。なお、この歌詞は難解であるが、ここは、判詞にも「げにやさらは」とあるごとく、「げにやさらば」の意に解して、下句へ続けたものと思われる。

◎いまはたゝれもさそおほえたる 「現爾也娑婆」の歌詞「とんどにさぞや、おぼえたるな」を踏まえた表現。今はやはりだれもがそう（月に歌おうと）思っている、というほどの意であろう。

◎けにや娑婆の秘曲 「現爾也娑婆」が秘曲であったかどうかは、未考。

◎其興侍り 「興」は、歌論用語で、歌の趣向のこと（三十二番語注「興なきにあらす」の項参照）。

◎けにやさらはさぞ覚たる、誰、いひおほせざるにや 「言ひおほす」は、歌の言葉が前後照応して表現が完結している、というほどの意で、「初句のゆくすゑ、いひおほせられてもきこえず」（六百番歌合、恋二、一番判詞）など、歌合判詞によく用いられる。全体で、「げにやさ（ら）ば……さぞ覚えたる」という表現の中の「たれ」という言葉が自然だ、というのか。

◎霧は降物に打越を嫌新式の心 「降物」は、連歌用語で、句に詠み込む事物のうち、雨・露・霜・雪など、空から降ってくる（と考えられていた）もの。「新式」は、二条良基らによる応安の『連歌新式』（いわゆる「応安新式」）を指すのであろう。同書には、「可隔三句物」として、「雨・露・霜・雪・霰如此降物」とあり、また、「霧」は降物ではないが、「可嫌打越物」として、「霧降物」とある。

◎可然は侍れと 白石本は「可然侍れと」と「は」を脱するが、誤写であろう。

◎山の打こし、たゞ詞にや 「ただ詞」は、歌論用語で、歌語・雅語に対して、俗語のこと（十六番語注「たゞこと葉」の項参照）。山を打ち越す意の「打越」は俗語だ、というのである。もっとも、連歌用語としての「打越」にしても俗語ではある。

◎彼是をかよはして 「通はず」は、比較検討すること。「かれ是を通はしなぞらへて、持としをはりぬ」（建春門院北面歌合、臨期違約恋十番判詞）の例がある。

◎恋わひて神にたむけのつらね哥 「連ね歌」は「連歌」の別称。連歌を神に手向けることは古来盛んに行われたが、恋の成就のために行うことは実際にはなかったかと思われる。

◎あふさかやま 判詞に「会坂」とあるが、「逢坂山」または「相坂山」と書くことが多い。山城国（京都府）と近江国（滋賀県）との境にある山。交通の要衝で、古く逢坂の関が置かれていた。歌枕。古来、手向の神ないし関守の神がいるとされ、「……近江道の相坂山に手向けして……」（万葉集、十三、雑歌）、「もみち葉を関守る神に手向けおきてあふ坂山を過ぐる木枯らしへ実守」（千載集、五、秋歌下）などと、「手向け」、「手向く」という語とともに詠み込まれることがあった。また、男女が「逢ふ」に通じることから、「名にし負はば相坂山のさねかつら人に知られでくるよし

もがなへ定方√」（後撰集、十一、恋三）など、恋の歌に多く詠み込まれたことは周知のとおり。

◎ふし物 賦物。連歌用語で、句の中に一定の物の名を詠み込む規則。また、その物の名。鎌倉初期には、例えば魚鳥の名を交互に詠み込むなど、一卷全体に及ぶものとされたが、次第に形骸化し、十四世紀末には、発句のみ賦物を取るのが普通になっていた。しかも、その多くは、「山何」、「何人」などの、「何」の箇所句中の一語を入れてある熟語を構成する、というだけの単純な形式であった。ここは、「何山」の「何」に「あふさか」を入れよう、というのである。

◎別地 「地」は宛字。類従本の「別路」が正しい。

◎なくかうたふか きぬぎぬの朝の情景であるが、早歌の歌い方の特徴を言いかけていたのであろう。

◎かれこゑのしほりあげたる 「絞り上ぐ」は、近世の用例しか管見に入らないが、声を絞り出す意と解してよからう。ここも、早歌の歌い方の特徴を言いかけているものと思われる。「嗚れ声」、「絞り上ぐ」ともに、もちろん、俗語。ただし、「絞る」は、涙で濡れた袖を絞ることから「袖」の縁語。伝統的な縁語を俗語に転用した点が滑稽。

◎そてのなこり 袖余波。早歌の曲名であり、また、その曲の歌詞「さても此のつれなく見えし在明にや、きぬぎぬの袖の名残、忘る間なきは、暁思ふ鳥の空音……」（『日本歌謡集成五』所収『宴曲集三』）の一節。男女が重ね合わせた袖を離して別れることから、きぬぎぬの朝の名残惜しさをいう。

◎山を賦物にて会坂の手向 山を「賦物」にするということから、恋に縁のある「会坂」を連想し、さらに、その「会坂」から「手向け」という語を連想したことをいう。

◎よき連哥のよりあひ 「寄合」は、連歌用語で、付句のある言葉が前句のある言葉と縁語的な関係にあること。また、その言葉。ここは、歌合の判詞であるから「寄せ」（歌論用語で、ある事柄に関連する言葉。縁語など）というべきところであるが、連歌にちなんで、あえて「連哥の寄合」と言ったのである。

◎神明納受の法楽なるへし 「神明」は、神をたたえていう言葉。「納受」は、神仏が人間の願いを聞き入れること。「法楽」は、神仏を楽しませるために和歌・芸能などを奉納すること。連歌は、その守護神とされる天神などに、しばしば

奉納された。

◎袖の余波の美声、ちか比の早哥の聴聞、耳をおとろかし侍り 「ちか比の」は、ことのほかの、の意。右歌をほめるのであるが、「美声」、「聴聞」、「耳を驚かす」など、早歌に縁のある言葉を用いてたわむれたのである。なお、この後に、忠寄本・明暦板本・類従本には、「持とすへし」とある。

◎「またこのおりに、花か候はず候 「に」は、白石本・忠寄本・明暦板本・類従本は「には」とする。執筆しよひつ（連歌の席で、宗匠の指図に従って句を記録する役。指合・去嫌などを指摘したり、連衆の地位や力量に応じて句を促したりして、滞りなく会席が進ぶように気を配ることも、その任務とされた）の言葉。「折」は、連歌の懐紙（句を記録する紙）の一枚をいう。折紙（紙を横に二つ折りにしたもの）を用いたことからこの名がある。もっとも一般的な百韻の連歌では、初折・二ノ折・三ノ折・名残ノ折の計四枚の折を用い、それぞれの表裏に都合百句を書く。そのうち、初折の裏の十三句目・二ノ折の裏の十三句目・三ノ折の裏の十三句目・名残ノ折の裏の七句目は「花の定座」とされ、これらの句には必ず「花」という言葉を詠み込むこととされている。ただし、「定座」よりも前に引き上げて「花」を詠むことも可能。ここは、「定座」が近づいているが、また「花」の句が出ていない、と注意を促したのである。

◎かた見かたみにのこるなてしこの 早歌「露曲」の一節。「さてもかの夕顔の、宿りの垣穂荒れはて、通ひ絶えにし古郷の、記念に残る撫子の、露の契や忍びけん」（『日本歌謡集成五』所収『外物』）

〔絵〕

連歌師は剃髪して僧衣を着、右手の扇を膝に立てる。その前に執筆。執筆は垂髪の少年で（執筆には、将来有望な若者が選ばれることがあった）、小袖を着、文台の上に懐紙を広げ、右手に筆を持つ。文台の脇に硯箱。懐紙には「賦山何連歌」の文字が読める。白石本・忠寄本・明暦板本・類従本は、執筆の服は直垂。早歌諷は、烏帽子、直垂、袴姿で、腰刀を差し、右手に扇を持つ。

〔参考〕

○ 連歌師のかつうることはなきものを

いづくへゆくと五句はありなん

(竹馬狂吟集)

○ 料足をたし合はせたる寄り合ひに

ふたりの連歌うちひらめたり

(同)

○ 連歌師と連歌せぬ人行きつれて

発句はあれど脇の句はなし

(同)

○ 連歌のかへさ雨にぬれけり

唐傘のさしあひありて貸しもせず

(犬筑波集)

○ 第二の言葉である能^{モノ}は学芸を意味し、またはそのことに器用であり、技能があることを意味する。……彼らはこれを十種数え上げている。……第八はある種の詩歌で、多くの人々が一緒に集まって、ある主題^{テーマ}なりある詩句〔発句〕なりにもとづいて作るもので、各自は前の句に関連させて自身の詩句を作つて続けてゆく。これは貴人の間ではよく行なわれることで、多大の理解力と判断力を要するものである。

(日本教会史、二卷、一章)